

〔書評〕

あざの耕平『BLACK BLOOD BROTHERS 1

―ブラック・ブラッド・ブラザーズ 兄弟上陸』を読む

平野 芳信

あざの耕平氏は小説家として、ブレイク寸前ではなからうか。二〇〇四年七月に刊行された、氏の新しいシリーズ『BLACK BLOOD BROTHERS 1―ブラック・ブラッド・ブラザーズ 兄弟上陸』（以下『BBB』と略す。）第一章を読みはじめて、私はそう確信した。氏が、我が人文学部日本語文化論コースの卒業生だから、お世辞ではない。掛け値無しにそう思うのだ。なぜ、断言できるのか？ 答は一言に尽きる。とにかく面白いからだ。

まず設定が秀逸なのである。あざの氏が『大都会の吸血鬼（メトロポリタン・ヴァンパイア）』という作品で、作家として世に出る契機をつかんだ後発表した『ブートレガース 神仙酒コンチェルト』も『Dクラッカーズ』シリーズも共に、ジャンルとしては「ドラッグ（薬）もの」に属することは、すでに前号で言及した。

それを受けるかのように氏自身、今回『BBB』のあとがきで、

どうも筆者は「何かを飲んでパワーアップ！」系の話形が好きなようです。それが密造酒だったりドラッグだったりする辺り

が、ぬぐいたい筆者の傾向ってことになるのでしょうか？ して今回は、ずばり「人の生き血。」

と自らの才能の質を自覚したかのように記している。

作家は処女作に向かって成熟を強いられるというが、氏はまさに『大都会の吸血鬼（メトロポリタン・ヴァンパイア）』という原点に回帰し、おそらくは代表作になると思われる「吸血鬼もの」を満を持して世に問うたのである。

ヴァンパイア小説はプラム・ストーカー『吸血鬼ドラキュラ』（一八九七年）というゴシック・ホラーを嚆矢とするが、一般には活字よりも映画によって、その輪郭が流布されたといえるだろう。なかでもクリストファー・リー（最近では「スター・ウォーズ エピソード2/クローンの攻撃」「ロード・オブ・ザ・リング エピソード2」）に出演している、あの長身瘦躯の俳優であり、ドラキュラといえは彼のイメージが定着している。）がドラキュラ伯爵を演じた彼自身の出世作『吸血鬼ドラキュラ』（一九五七年）は誰しも、何

処かで一度はその映像の一部なりとも目にしたいところがあるに違いない。

それ以降、吸血鬼をテーマにした映画や小説は数限りなく生まれている。記憶に新しいところでは、トム・クルーズとブラッド・ピットの共演で話題になった映画「インタビュ・ウィズ・ヴァンパイア」(一九九四年)がある。このように人口に膾炙したヴァンパイアの話を選択している点ですでに、面白さの第一条件を満たしていると思われる。

主人公望月ジロー(いうまでもなく、長身瘦躯である。)は、かつて銀刀と呼ばれた吸血鬼で、弟望月コタロウと特区を目指している。特区とは十年前の一九九七年、吸血鬼の存在が公式に確認されたいわゆる「九龍(クローン)ショック」事件の後、表向きには絶滅した吸血鬼と人間が共存するために作られた、日本の横浜沖にあるに架空の人工島を指す。そうこの作品は、いわゆる「終末大戦後の物語(アフター・ウォー)」の話を踏襲しているのである。

人は一見、新奇な物語を知りたがっているようだが、実はよく知っているお話を同じように、いやむしろ圧倒的に求めているのかもしれない。人間は忘れていることを思い出すことが、物語を読む楽しさの本質であり、プラトンはその「想起」呼んだが、あざの氏の『BBB』には想起する快楽が満ちあふれているのである。

登場人物の造形においても、あざの氏は今回並々ならぬ手腕を発揮している。主人公ジローとコタロウ兄弟は、兄が黒髪黒眼の東洋系、弟が金髪碧眼の西洋系という現実にはありえぬ容貌を有している。巻が進めばその理由が明らかにされるだろうが、その謎は読者の「それから先を読みたい」という欲望をかきたてて止まない。

脇役たちも華やかである。たとえばジローの師クロウは、大陸に渡ってチンギス・ハーンとなった伝説の主、あの九郎判官義経がなぜ吸血鬼として生き延びているのと思えない。これが今年の大河ドラマを全く意識しない偶然のキャスティングだとしたら、あざの氏の才能はまちがいになく、時代とリンクしつつあるといえるだろう。

物語は始まったばかりであり、謎だらけである。これ以上、評するのは時期尚早というべきだろうし、ネタばれになっても(他の脇役や見事なパースペクティヴの多層化についても触れたいは山々なのだが)、これから読む向きには無粋と感ぜられるだろうから、この辺りで筆をおくことにしたい。

最後にあざの氏に質問してみたいことがある。『BBB』は、あざの版『赤と黒』ですか？。

(二〇〇四年七月二五日 富士見書房刊 三〇〇頁 五八〇円)
(ひらの・よしのぶ)